

36 万葉歌人 土形娘子

筆者 鷺山 哲朗 ・ 松永 正志

日本最古の歌集 万葉集の第3巻 428番に

ひじかたの をとめ はつせ やきはう
土形娘子を泊瀬の山に火葬りし時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌一首

こもりく はつせ ま いも
隠口の泊瀬の山の際に いさよふ雲は妹にかもあらむ

(土形娘子を泊瀬山に火葬したとき、雲を火葬の煙に見立てて柿本人麻呂が読んだ挽歌)

「隠口の」は「泊瀬」にかかる枕ことば、決まり文句のようなもの。

泊瀬の山：奈良県桜井市初瀬 古代大和朝廷の聖地であり、葬送の地でもあった。

妹：愛する人

※ 泊瀬の山々のあたりにいつまでも去りかねている雲 あれは、亡くなった妻の姿を変えた形なのだろうか。

この「土形娘子」については、遠江国城飼郡(掛川市土方)の出身であろうと昔から伝えられている。柿本人麻呂が「妹」と呼んだ「土形娘子」について、様々な文献から考察してみた。

1300年以上前の奈良時代、遠江の国城飼郡の土形氏の娘が采女(うねめ)として奈良の都に上がった。娘は草壁皇子や持統天皇に仕え、その才媛により草壁皇子に恋され、皇子亡き後その母、持統天皇に可愛がられ、宮廷で女官として活躍した。

娘は歌人としての才能を発揮し、歌聖・柿本人麻呂との相聞贈答の歌の世界からその才能が人麻呂の目に留まり、柿本人麻呂との贈答歌を幾首か歌っている。しかし701年(大宝元年)10月19日、娘はなんらかの事情で入水自殺をしたと伝えられている。

あの歌聖柿本人麻呂と土形娘子は奈良の都でめぐり逢い二つ無き恋をしていたという。人麻呂が万葉集においてただ一度だけ、ただ一人だけ「妹」と名指しで歌っている事実は決して偶然ではあるまい。歌心の真実と、愛の真実という、文芸的、人間的な、ただ一つの真実の反映にほかならなかったと思われる。

采女とは

地方豪族が大和朝廷へ服属の証しとして貢進したのが始まりとされるが、後に制度化され「采女は郡少領(次官)より以上の姉妹、及び子女の形容端正なる者を貢」とある。つまり、容姿端麗を条件に郡少領主以上の地方豪族に子女を貢進させた。天皇に近侍し、この食膳に奉仕するのが主な役割であったとされる。定員66名の説あり。

土形の君の伝承

「古事記応神段によれば大山守皇子（応神天皇の子）の御子土形の君がこの地を領有し、幣岐（はぎ）の君、榛原の君とともに菊川の国に栄えたと伝えきいている。三氏が同一地域にみられるのは遠江の国のみで、諸国鎮撫使（鎮撫：しずめ安んずる）として和邇（わに）氏に従って海伝いにこの地へ来たものか、或いは在地有力者が畿内政権への服属の証として皇子奉斎（いただき支える）という伝承を語り伝えるものか全く不明である。」註①

豪族土形（土方）氏とは

「土形（土方）氏は、城飼郡土形郷を本拠とした古代豪族で、その氏は古事記、万葉集に出てくる。土形（土方）氏家系図によると、一族は立郡以来鎌倉時代に至るまで郡司や在庁官人を務め、のちに今川氏に被官となり、今川氏滅亡後は定かではない。「吾妻鑑」によれば、横地氏と共にその名が書かれているという。」註②

地名、土方の由来

「土方を「ひじかた」とはなかなか読めない。辞書にもそう載っていない。しかし、由来の事実を知れば難しい事ではない。土のことを昔は「ひじ」といい、海が引いて土がかたまったところなので「ひじかた」という地名が生まれた。」註③

豪族土形（土方）家は立派な伝承をもつ由緒ある家柄のおかげで国守のおぼえめでたく、利巧で美しい娘が年ごろに育った時、国守の取り成しで奈良の都へ行けることとなった。

しかし、美人薄明の言葉の通り若くして死での旅になってしまった。歌人柿本人麻呂は惜しんで挽歌を娘に捧げている。



この歌の歌碑

堀口大学揮毫

奈良県桜井市

歌人としての土形娘子

土形娘子の名は冒頭で記した通り、万葉集 巻3、428 柿本人麻呂の歌の前文に唯一ヶ所だけ出てくるだけであるが、万葉集研究家の末田重幸氏は万葉集 巻3、428番とその前文から驚くべき推理を展開した。

氏によれば「土形娘子の歌ったとおもわれるものが万葉集に詠み人知らずとして、或い

は柿本人麻呂の歌として数首存在し、しかも万葉集随一の女流歌人の称号すら与えるほどの素晴らしい歌人であったとの事である。

人麻呂の〈隠（こもり）妻〉が女官である土形娘子であるとする根拠はこの歌にある。この一首が「万葉集」を含む当時の記録の中で、人麻呂の妻土形娘子を証明する唯一の積極的な証言である。

土形娘子は、まぎれもなく人麻呂の妻である。

土形娘子は持統天皇（天武天皇の皇后）の頻繁な近畿出遊＝吉野をはじめ伊勢、紀伊などにほとんど随行していたとみられる。では、この妻の生存がいつごろまで確認できるかということ、701年9月の上皇・天皇の紀伊幸のときはたしかに随行していたはずで、その時も人麻呂は妻を追って紀伊に単身旅立ったとみられる。当時の状況から考えて妻土形娘子の死は同年10月19日一行が紀伊より帰還した直後だったと推測される。

・・・紀伊路随行中における人麻呂との経緯から世間に顔向け出来ない事情が生じて持統上皇の怒りを買い、ついに死いたった事態が想起される。家の妹も土形娘子死後ほどなくして亡くなったようだ。」

（ふりかえると）・・・人麻呂の妻となる女性は二人浮かんでくる。「隠り妻」と「家の妹」

「家の妹」は正妻とみられる。（「隠り妻」は人目をしのんで隠れている妻）

・・・人麻呂が恋慕してやまなかったこの妻は軽の里に住んでいた。土形娘子は軽宮に仕える女官だったのである。

土形娘子について斉藤茂吉はつぎのように書いている。

考に「此の娘子は采女なるか」とあるから、若し采女とせば遠江の土形の郷から来たものであっただろう。（※考は賀茂真淵の「万葉考」）

「采女は郡の小領以上の姉妹及び子女の形容端正なる者を貢ぎ」せしめて、天皇の側近に仕えさせる女性である。

軽宮で皇太子草壁（持統天皇の子）に仕える。土形娘子は采女とよばれる女性だったのかもしれない。実際は皇太子の早世で采女とよばれる女性になる機会はなかったとみられる。「××娘子」といったよび名は、そのへんの事情を反映したものではなかったか。

○ 人麻呂と土形娘子の邂逅（^{かいこう}思いがけなく出あうこと、偶然の出会い）

人麻呂と土形娘子の運命的というべき邂逅の場面をうかがわせる問答歌が万葉集巻11に載っている。

万葉集巻11 2508 問答

^{すめろぎ}皇祖の神の^{みかど}御門をかしこみとさもらふ時にあへる^{きみ}公かも

御門：特に皇居の門をいう（ここでは天皇の祖を祭る神社の門）

かしこみ：恐れ多くも

さもらふ：時の来るのを待つ

まそ鏡見とも言はめや玉かざる石垣淵^{いはかきふち}の隠^{こも}りたる妻

玉：美称

かざる：輝く

土形娘子は軽宮に住み、はじめ草壁皇子に仕えていた、ところが立太子（681年）後まもなく皇太子草壁は島宮に遷る。そして、土形娘子の方はそのまま軽宮に留まることとなって、まだ幼い軽皇子に仕えことになったらしい、そんな状況がつづいているとき、人麻呂が「近江荒都を過ぎる時」の歌で宮廷に登場する。688年とみられる。

そのとき軽皇子は6歳だった。当時、皇太后（持統）は皇室問題の先行きに不安を抱いていた。実子草壁皇太子は政務に耐えられない状態だった。それだけに皇孫軽に望みをかけ、目に入れても痛くない状態だったろう。いつも軽皇子を身近におくことが多かったと思われる。いきおい、土形娘子も女帝の側近に侍（はべ）ることが多かったであろう。

皇祖の神の御門をかしこみとさもらふ時にあへる公かも

人麻呂と土形娘子の邂逅の時と場所は、そんな宮廷だったと思われる。土形娘子の才媛ぶりはこの問答歌から充分うかがえる。そして既述のとおり草壁皇太子に仕える女官だったとすれば、この才媛が草壁の目にとまらなかったはずをない。・・・しかし、そうなる、正妃、阿閉皇女（元明）との関係で新たな問題が生ずることは必定だろう。皇后（持統）にとつてはやっかいで重大な問題をはらんでいる。草壁皇太子が軽宮に遷ることになるのは、こんな事情が背景にあったと考えられる。おそらく皇后のはからいで皇太子と土形娘子のあいだは引き裂かれ皇太子は島宮へ、土形娘子はそのまま軽宮に留まることになるのである。

・・・草壁は皇位にも即かず689年4月没してしまう。それまでの長い数年間を失意のうちに過ごしていたと考えられる。人麻呂は草壁皇子（662—689年）とほぼ同年輩である。だから土形娘子と草壁皇太子の未完のロマンがやがて草壁没後、土形娘子と人麻呂の邂逅とロマンの開花に発展する余地がある。

・・・土形娘子は軽宮において、はじめ草壁皇太子、ついで軽皇子に仕えてきた女官だった。この上、草壁皇太子の強い恋の対象にもなった女性だったから、今や、人麻呂と土形娘子のあいだの恋はどれほど大きく燃えあがっても、公然と夫婦の契りを結ぶわけにはいかない。二人の恋はあくまで「隠りたる妻」の関係に留まざるをえなかった。

・・・こんな状況のもとで、人麻呂と土形娘子のあいだの、恋と文芸的興味とが分かちがたく結びついた相聞贈答の世界が艶やかに展開していくのである。

万葉集 卷 13 柿本人麻呂 土形娘子相聞贈答歌

万葉集 卷 13 3 2 2 3 作者不詳《土形娘子》
贈歌

秋の赤葉（もみぢは）まきもてる 小鈴もゆらに
手弱女（たわやめ）に 吾はあれども
引きよちて 枝もとををに うち手折（たお）り
吾（あ）は待ちて行く 公（きみ）が挿頭（かざし）に

※ みずみずしく色づいた秋の紅葉 手に巻いた小鈴を鳴らしながら
か弱い女の身のわたしではあるが 引きよじて 枝をたわわに折りとって
わたしはもってゆく あなたの挿頭（かざし）にと思って

万葉集 巻13 3224 柿本人麻呂
反歌

独りのみ見れば恋（こほ）しみ神名火（かむなび）の山の
黄葉（もみじ）葉 手折（たお）りけり君

※ ひとりだけで見ていると あなたが恋しくなって 神名火山の 黄葉を折り取ってしまいました。

歌は神名火山とその紅葉を主題になされる恋の相聞である。はじめの一編が土形娘子の贈歌、それに人麻呂が答えた。二編の取合せをそう解することが出来る。この贈答をみると、贈歌の主がいかにもすぐれた歌人だったかよくわる。

これほどの歌の作者は稀にみる才人にちがひなく、作者はきわめて限られてくるはずだ。作者が女性であることは歌の内容からはっきりしている。そして、この才媛の相聞に遜色なくこたえうる歌人もまた限られよう、この組み合わせが人麻呂と土形娘子だった。

二人は長年にわたる相聞贈答の歌の世界にともに生き、その喜びを分かちあってきた。当代歌人の男女の双璧だったと見受けられる、人麻呂がこの妻を恋慕してやまぬ理由もわかるような気がする。

万葉集 巻13 3306 作者不詳《土形娘子》
反歌

いかにして 恋止むものぞ天地の 神を祈れど吾（あ）は思ひ益す

※ どうしたら恋しく思ふ心がやむのかと 天地の神を祈った。
けれど わたしの思いは増すばかりだ。

万葉集 巻4 496 柿本人麻呂
相聞

み熊野の浦の浜木綿百重なす心は念（も）へど直（ただ）にあはぬかも

万葉集 巻4 497 柿本人麻呂

相聞

古（いにしへ）にありけむ人もわがごとか妹に恋ひつつ宿（い）ねかてずけむ

万葉集 卷4 498 柿本人麻呂

今のみのわざにはあらず古（いにしへ）の人ぞまさりてねにさへ泣きし

万葉集 卷4 499 柿本人麻呂

百重にも来及（きし）かぬかもと念へかも公（きみ）が使の見れど飽かざらむ

この4首が、前後二首ずつ分かれ、内側と外側でそれぞれ対応するように考慮された配列に成る相聞贈答歌であることはすでに指摘されている。作歌時期は701年9月の紀伊行幸の時とみられる。このときの、人麻呂と土形娘子が紀伊随行の旅路において成就した珠玉の贈答歌だったのである。

すなわち、この歌4首には、人麻呂と土形娘子のあいだのロマンスの背景として、草壁皇太子と土形娘子の軽宮から島宮におけるころの「いにしえ」の悲恋が歌いこまれているのである。

土形娘子の才媛ぶりについてはこれまでも述べた。とりわけこんどの相聞の歌4首にみる歌境は心技兼ね備わる贈答の妙技と言えるだろう。

はじめの贈歌2首の作者が人麻呂であり、あとの答歌2首が土形娘子となる。この贈答の「掛けあい」の妙技からして、隠妻土形娘子が人麻呂にまさるとも劣らぬ才能の持主なることをうかがわせる。

このばあい、「百重・古（いにしへ）」などの語に対応させて巧みに答歌が歌いこまれる。そして、この4首の対応の妙はすでに、答歌の作者たる妻の才腕によって生じたのである。これほどの才媛は「万葉集」でも珍しい。むしろ稀にみる天才女流歌人だったといっておかろう。

帯紙のことばを記せば

二つ無き恋をすれば 人麻呂自身がそう告白している。人麻呂に^{ひけん}比肩（肩を並べる）する歌人は万葉広しと言えども少ない。その人麻呂が「二つ無き恋を」して、恋慕に身を焦がすほどの才媛がいて、打てばひびくような相聞珠玉の贈答歌を送って寄こす。その女性が女官土形娘子だった。二人のあいだに展開される相聞の境地は、文芸的創造という高い精神的歓喜を志向しつつ、濃い恋情に彩られるという、じつに個性豊かなものになった。」註④

ここからは 万葉の道 明日香編 巻の1

「泊瀬の道は、柿本人麻呂の駆け落ちの道ではなかったか。

住坂の峠まで来たところで、ふりかえって泊瀬の道辺にありし日の人麻呂の姿を追いかけてみようと思う。

泊瀬道周辺の人麻呂に関係のある歌群は、人麻呂作歌2首、人麻呂集歌首、人麻呂の妻の歌1首の計6首が残されているが、これらの歌を素材にして人麻呂のロマンを考えたい。

人麻呂作歌のうち、個人的作品と考えられるものは、土形娘子を泊瀬山に火葬（やきはぶ）る時、という題詞のつけられた次の挽歌である。（冒頭で紹介）

隠口の 泊瀬の山の山の際に いさよふ雲は妹にかもあらむ（万葉集 巻3 428）

・・・惜別の悲しみを歌いあげた旋律ともあわせ、人麻呂が「妹」と死者に呼びかけているので、人麻呂と娘子とはなんらかの情缘関係があったと想像されること、もう一つは「続日本記」の文武4年（700年）3月に火葬のはじまりの記録があるので、娘子の死はそれ以降であることの2点である。

人麻呂に何人の妻がいたかは諸説あって確定していない。しかし泊瀬に1人の妻がいたことだけは確かである。（当時の貴族社会は1夫多妻）

万葉集 巻4 504 柿本人麻呂妻

君が家に 吾が住坂の家道をも 吾は忘れじ 命死なずば

・・・むかしは夫が妻の家に通う妻問い婚が一般であったから、君（夫）の家に自分（妻）が住むことはあり得ず、したがった「君」と「我」とを逆に誤写したとか、人麻呂が妻に贈ったという題詞から、「贈」の字が脱落したものなどと いった解釈が行われてきた。

・・・いったい人麻呂には何人の妻がいたかは諸説のわかれるところだが、人麻呂の全作品、人麻呂の妻の歌と題する作品を通じて、人麻呂の妻の可能性のあるものは、①軽の里にいた妻 ②羽易山に葬られた妻 ③石見国で別れてきた妻 ④依羅娘子 ⑤住坂で一緒に住んだ妻 の5人が考えられる。・・・これらの妻は、何人かは重複しているものと考えて差しつかないだろう・註⑤

人麻呂は持統天皇・文武天皇の二朝に仕えた歌聖として後世まで語り継がれている。696年 高市皇子の死をとぶらう人麻呂の挽歌（長歌）を作った前後約20年が人麻呂の活躍した時期（688—706年）

（即位年 天武天皇673年 持統天皇687年 文武天皇697年）

（土形娘子701年没）

土形娘子はいつ頃生まれ、自分の意思ではなく奈良の都に旅立ち、さぞかし心細かったことだろう、都に頼る親戚縁者はいたのだろうか、若くして思いもよらぬこの世との別れ、1300年以上前のことである。当時の女性、とりわけ地方豪族の娘子であり何も記録は残っていない。

「土方（土形）氏の館はどこにあったのか、先に記載した通り土方（土形）氏は、城飼郡土形郷を本拠とした古代豪族で、その氏は古事記、万葉集に出てくる家系である。土方（土形）氏館は掛川市大字上土方小字堀内、小字公文字（鷲山医院西側の市道を公文字線という）周辺を中心として築かれていたと推察される。館跡は主要地方道掛川大須賀線の小笠橋西側、小笠山丘陵尾根の舌状突端の平地で、外堀やかごの鼻という屋号の家がある。」註⑥

御前山(ごぜんやま)、御前田(おまえだ)の地名もある。

結びに、

万葉集の作者不詳の歌の処に作者として土形娘子の名前が載っていたとすれば、遠江の国の歴史には大きく光が当たり、万葉女流歌人「土形娘子」の出身地として取り上げられ、遠江の国城飼郡は万葉女流歌人土形娘子の故郷として広く世に知られたかもしれない。

註① 永田甲子男著 豪族土形氏の系譜 5 ページ

註② 静岡県文化財調査報告書 第 23 集 静岡県の中世城館跡 312・313 ページ

註③ 溪水 鷲山恭平翁を偲びて

註④ 柿本人麻呂 無冠の恋歌 末田重幸著 169～184・187・188・241・288・289 ページ

註⑤ 万葉の道 明日香編 巻の 1 扇野聖史著 153・154・156 ページ

註⑥（静岡県文化財調査報告書 第 2 3 集 静岡県の中世城址より）